

発達障害のある生徒に対する自立に向けた取り組み
について
—学校と家庭・地域との協働を中心として—

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2022-07-01 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 新井, 豊吉 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10098/00029084

発達障害のある生徒に対する自立に向けた取り組みについて

—学校と家庭・地域との協働を中心として—

新井豊吉

I. はじめに

ASD (自閉スペクトラム症) の障害特性として「社会的コミュニケーションの偏り」といわゆる「こだわり行動」があげられる。しかし当然のことながらその特性は個性とあいまってひとりひとり違うものである。つまり障害特性は一人として同じではない。筆者がかかわってきたASDをもつ子どもたちの保護者達から話を聞くと「買い物に行く道に飛びだしたり奇声を発したりして大変だった」「一緒に遊ぼうとしても嫌がって泣いた」「ほめてもうれしがらない」「抱きついてこない」など育てにくさを感じる意見が多く聞かれた。その結果、子育てが楽しいと感じる機会が少なく、逆に叱責する場面が多かったという意見も多く聞いた。本事例の対象児も保護者(主に母親)が小学部低学年から育てにくさを感じ、学校でも叱責されることが目立った生徒を取り上げる。なお本文中は対象児をAさんと表記し、高等部から卒業後までを支援した筆者を担任または元担任と表記する。Aさんは小学校から特別支援学校の中学部に進学した。中学部においては家庭内での暴力、破壊行動などの問題行動を繰り返していた。それを聞いた中学部担任がまたAさんを叱るという繰り返しであった。その後同校の高等部に進学する。担任は高等部1年の学年主任及びAさんの担任としてかかわることになる。本事例はAさんに対する担任を中心とした教員集団、保護者、福祉など地域の資源を活用した支援過程を振り返り、幼児期からどのような支援が必要であったのか、また学齢期においてどのような支援が効果的であったのかを整理、考察することを目的としている。

II. 問題の所在

1. 生きにくさを抱えるAさん

AさんはIQ50、広汎性発達障害(以下、現在のDSM-5に合わせてASDと表記する)の診断があり。発音は不明瞭であるが簡単な日常会話は可能であった。特別支援学校中学部から高等部に進学する際の、中学部担任から高等部全教員への引継ぎはかなり深刻なものであった。

- ・小学校のときから地域のスーパーで大量のチラシやゴミを無断でもってくるので出入り禁止になっている。そうすると母親に車で違う町と同じ系列のスーパーに行くように命じ、同じように大量のチラシやゴミをもってくる。

- ・毎日スポーツ紙を5紙コンビニで購入する。これはAさんが好きなプロ野球球団の記事を読むためである。内容はほとんど同じであるが、記事の体裁がちがうため全部違う内容だと捉えるため毎日5紙購入しないと満足できない。また列に並ばずに購入するためコンビニからも苦情がきている。

- ・家庭では自分の要求が通らないとテレビや椅子などを窓から投げたり、壁をなぐって穴をあけたりペットの犬をいじめたりする。犬は毎回通院が必要になるくらいのけがを負っている。

- ・自力登校の力はあるが登校途中に同級生にいたずらをしたり暴力をふるったりするためスクールバス通学となっている。

- ・中学部では男性の教員二人を担任とし、悪いことをした場合は厳しく叱責し、良いこと悪いことを教えるようにしてきた。罰として廊下の掃除などをさせていた。

・校内でも一人で行動させることはせずに常に教員が同行し見張っていた。

・家庭は父親が単身赴任であり不在なことが多い、母親はAさんに対して受容しすぎるのもっと厳しく接する必要があると学校からは母親に指導している。

<エピソード1 元の学部の前で緊張する>

「高等部進学後4月、担任と給食のワゴンを取りに給食室に向かうときに中学部の廊下を通った。Aさんにとっては懐かしい教室であるが、Aさんは大きな体を担任の背中に回って隠した。それに気づいた元中学部担任が近寄ってきて、覗き込むようにして『何か悪いことはしてないか?』と語りかけた。はAさんはおびえたような顔をして何も答えなかった。担任は『いい子でやっています』と答えた。」

身長も180センチあり、体重も80キロに近いAさんのおびえる様子を見て、学校では問題行動がないようになりかなり厳しい環境のもとで過ごしてきたことが想像できた。同時に、家庭での様子は変わっていないことを考えると、学校で叱られることに対して、本人はどれほど認識し、記憶を保持してられるのか、学校での説諭や罰がどれほど家庭でも問題なく過ごすことに効果をあげているのか疑問に思った。むしろ学校での緊張感がストレスとなり、家庭での問題行動に拍車をかけていることになっているのではないかという思いも浮かんだ。

Ⅲ. 支援方法

1. 環境のリセット

担任はAさんが高等部に進学し教室も教員集団もクラスメイトも変わったことをきっかけに、Aさんに対する対応をリセットしようと考えた。クラスでは担任も副担任も中学部からの引継ぎは知らないというスタンスをとった。それはエピソード1に書いた通り、自分のことを周りが知っているということで彼自身が身構えてしまい、自分自身の良さを出せず、再出発しづらいものになるのではないかと考えたからである。現在、Aさんの特性であるこだわり行動やパターン化はマイナス面に強く出ている状態であった。例えば家庭は自分の思うように振舞えるところ、母親は言うことを常に聞いてくれる存在、学校は叱れて行動を制御される場所、という具合である。それを高等部に進学したことをきっかけに、学校は叱られず良いことをしたら認められる、話し合える7場所、一人

でも行動できる場所、教員は認めてくれる存在、そのような意識を変えることをねらいとして環境をリセットすることとした。

<エピソード2 自信のない自分>

「第1学年5月、まだクラスの方針に慣れていない段階でAさんは担任に次のように語りかけた。『〇〇先生、ぼくひとりだけで大丈夫? なにか(悪いこと)するかもしれないから心配だ。中学部のときはいつも先生と一緒にだった』その表情はとても不安そうであった。担任は思わず『大丈夫。信用しているから』と返した。その瞬間、彼は『信用している』と繰り返しつづやき、とても恥ずかしそうに嬉しそうに笑った。はじめて見る笑顔であった。彼からするとおそらく今までかけてもらったことのない言葉であったろうし、教員と気持ちが通じた瞬間であったかもしれない。担任はこの瞬間、Aさんとうまくかかわっていくことができるかもしれないと直感した。同時に彼の自己肯定感の低さを再確認した。」

2. 乗り越えられる学習課題の設定

高等部では、国語・数学は能力別グループを組んでいた。担任は重度グループの担当であった。Aさんは能力的には重度グループではなく中間のグループであったが、まだまだ担任の目の届くところで学習してほしい、という思いがあった。また学習を通して、彼が一人のできる課題を設定し、そのことでほめられる経験を積むことによって自己肯定感を高めたいというねらいもあった。国語の能力としては、名前だけは漢字で書くことができる。ひらがなは大きな文字で書くことができるが「ね」「ぬ」など似ている文字は間違えることがあった。ひらがなと簡単な漢字は読むことができるが、名前以外の漢字は書くことはむずかしい。しかし、好きな野球選手の名前などは読むことができていた。パソコンやテレビなどの機械類の操作に関心をもち、説明書はよめなくても意欲的に操作しようとしていた。数学の能力としては足し算、引き算は筆算ではできないが携帯や計算機を使って計算することができていた。また経験的にお札を使っての買い物はできていて、生活力の高さを感ぜさせた。学習グループでの一斉指導場面ではAさんにとっては簡単すぎる課題が多いので毎回、個別の課題を用意した。特にAさんが気に入っていたのは漢字の練習である。これは本人の課題としても適切であったと同時に担任と一緒に黒板に向かって練習するという方法が気に入った様子であった。文字が下手なことに引け目を感じていたが一緒に大きく一画一画

ずつ書いていくことで恥ずかしさもなくなり、その都度ほめられることで達成感ももっているようであった。一斉学習では十分に理解できる課題をこなし、個別学習ではやや苦手な課題を叱られることなく担任と一緒に勉強するということがAさんは国語・数学の時間を楽しみにするようになった。

3. 受けとめても譲らない「ブローケンレコード・テクニク」

Aさんは順調に学校生活を送っていた。いくつかの係活動も行い自信をもって行動していた。職員室にある印刷コーナーに宿題のプリントをコピーするのも本人に行かせることにした。問題行動を起こさないためには、その行動を抑え込むよりも良い行動を増やし結果的に問題行動が減るということが理想的だと考える。もちろん職員室なので入るときには「失礼します」出るときには「失礼しました」という挨拶も教えた。職員室に出入りする行動には、学部をこえた多くの教員にAさんがまじめに学校生活を送っていることを認めてもらうという思いが担任にはあった。ただ担任はコピーの仕方を見守ったり、コピーが混んでいたりする場合もあるので毎回、同行し見守ることとした。学校では順調な滑り出しであったが、家庭での実態は変わっていなかった。チラシなどへのこだわりは学校でもみられた。漢字プリントの宿題は家庭での過ごし方に少しでも前向きな変化ができればと思って行ったことであった。本人も意欲的に取り組んでいた。そして宿題のプリント枚数は一日にこなせる分として、本人と話し合い漢字ドリル2ページ分、つまり一日2枚とした。ところがAさんは毎日、コピーするたびに「先生、もう10枚」「お願いだからもう20枚」最終的には「あと1枚だけ」としつこく要求するようになった。「一日に勉強できる分だけだよ」と言っても簡単には納得しなかった。その表情はやりとりを楽しんでいるという感じではなく、表情も硬く、こだわり行動に支配されているという様子であった。担任は、ここは要求を呑むとなし崩し的にルールが破られると感じた。そこでAさんの言葉は受けとめるが決して譲らないという手法をとった。つまり「壊れたレコード」のように声を荒げるわけでもなく淡々と無理だということを伝えるわけである。例えば「あと1枚」と言われたときには、同じ声のトーンで「そうかあ。でも2枚って決めたよね」「2枚でおしまいにしようね」と延々と繰り返すのである。あまりのしつこさに内心「いかげんにしろ」と怒鳴りたくもなるが、そこはじっと我慢である。そして「さあ、教室に帰ろう」といって先に印刷室を

でると、Aさんはちゃんと後をついてでてくるのである。ある日、担任が出張で応援の教員がクラスに入るようになった。もちろん引継ぎはしておいたが、その教員はAさんの懇願に根負けし「わかった。じゃあ、1枚だけだよ」と答えた瞬間、Aさんは非常に不穏な状態になったようである。これはAさんの「試し行動」であると感じた。つまり、この教員はどこまで自分の要求を聞いてくれるのか、要求をし続けると教員はどのような行動にでるのか、を試していると思われた。担任の場合はぶれずに叱ることもなく要求をのまなかったもので、落ち着いていたわけである。しかし、応援の教員の場合は要求をのんだので、日常的に揺らがない担任の姿をみて安定していたAさんは態度を変えた教員をみて不安定になったと考えられた。お互いが決めたことに対しては、大変でも一緒に取り組んでいこうというこの取り組みは、学年が進むごとにより有効なものとなっていった。

<エピソード3 家庭訪問で問題の深さに直面する>

「2か月が順調に過ぎ、家庭訪問の時期となった。学校では勉強にも熱心で何も悪いことはせず、クラスメイトとも穏やかに過ごしていた。担任はほめることばかりなので家庭訪問でも母親、Aさんと普通に過ごせるものと思っていた。自宅は電車と自家用車で学校から1時間ほどかかる場所であった。母親に駅まで車で迎えにきてもらい家庭訪問を行った。Aさんを居間に残したまま、母親が自宅を案内してくれた。Aさんがやや不安そうな硬い表情をしていたのは気にはなっていたが、そのまま母親について部屋を見て回った。母親は『ここも壊したんです』『ここも穴をあけたんです』『直してもまた壊すのでそのままにしています』と当たり前のように説明していた。担任は、そのようなことは言わなくていいのにと思いながらも説明を聞いていた。中学部からの引継ぎ通りの家庭での過ごし方だなと感じた。ソファに座っているAさんの顔をみると自宅でくつろいでいる雰囲気でもなく、学校で見せる人懐っこい顔でもなく、どこか暴れだす前のようなピリピリした雰囲気を感じた。担任と副担任は母親のAさんへの不満を遮るように、学校ではとてもまじめに過ごしていること、勉強も熱心にやっており何の問題もないことを伝えて、早めに帰ろうとした。担任らがAさんの様子をほめている間も彼の表情はかわらないままであった。自宅から自家用車でAさんも同乗したまま駅まで送ってもらった。しかし途中、Aさんは母親にたいして『学校まで送ってやれ』と言い始めた。担任たちは『この駅で十分だよ。電車のほうが早いから』と伝えたがAさ

んはがんとして譲らず、『送っていけ』と強い口調で母親に命令した。絶対に言うことを聞かせるという強い意志を感じた。その顔は別人のように怖かった。担任たちは、早く自分たちの姿が見えないようにすることが最善の方法だと考え、急いで車を降りて駅に向かった。」

Aさんの行動をどのような解釈したらよいか。いくつかの仮説をたててみた。まずは今まで思うまま暮らしてきた家庭に担任たちがきた変化への戸惑いである。学校では確かに中学部と高等部の切り替えに成功した。しかし、家庭は彼のテリトリーである。母親の彼に対する批判は担任たちがいたから言えたことだったろう。普段であれば母親に暴力をふるった可能性は高い。Aさんの表情の硬さは担任たちがいたので我慢していた結果かもしれない。教員は学校にいる存在、家庭にはいない存在、そのような関係が崩れた場合に混乱するASD児は少なくない。以前、町中で担任している生徒とすれ違ったことがある。その生徒は目が合い挨拶したのに挨拶を返してくれなかった。翌日、その生徒に「昨日、すれちがったよね。どうして知らないふりをしたの?」と聞いた。すると彼は「先生が町にいるとは思わなかった。だからびっくりして挨拶できなかった」と言われたことがあった。Aさんもそのように混乱したのかもしれない。

<エピソード4 面談での失敗>

1学期の終わりに面談週間があった。家庭訪問は彼のテリトリーである自宅を訪問したために問題が起きたと考えた。今回は学校での面談である。Aさんが日常的に問題を起こさずに楽しく過ごしている場である。そこに母親がきて話す分には彼も混乱しないのではないかと考えた。教室で担任、副担任、Aさんとお茶を用意しながら穏やかに母親を待っていた。机も四角形に設置しAさんのとなりには担任が座り、Aさんと母親がとなり同士にならないように配慮した。母親が笑顔で入ってきて挨拶をして席に座ると同時にAさんの顔つきが変わり、母親を力づくで廊下に出し始めた。どんなに担任らが止めても体の大きなAさんを止めることはできなかった。面談はこの時点で中止となった。」

なぜこのようなことになったのか。確かに中学部でも面談は母親とだけ行っていた。しかし、高等部では悪いこともすることなくAさんも母親も喜んでいて。学校でならば三者面談は成立すると考えていた。しかし結果は一言も話すことなく中止となった。副担任と話し合いをもち原因を探った。注目したのは短い時間ではあったがAさんが母親を廊下にだそうとしたときの二人のやりとり

である。母親が発する「どうしてそんなことするの」という否定的な言葉にAさんはどんどん興奮し、それにつれて母親の言葉も激しくなった。Aさんが一番こだわっていたのは家庭でも学校でもなく母親なのではないかという思いに至った。そこで学校では取り組みの優先順位を決めることとした。現在Aさんは学校で最大限の努力をしている。家庭の雰囲気が入るとそこで混乱する。家庭での生活態度の改善に担任らが直接介入することはできない。ある意味、母親にアドバイスだけして改善を求めるのは、すでに家庭での生活スタイルが確立している現状では無責任であると考えた。そこで学校でできることを広げていくという方策をとることとした。

3. 母親の思いを聞く

担任らはAさんのこだわりや今まで培ってきた生活を変えることに対する抵抗の強さを軽く考えていたのではないかと反省した。それは学校生活が順調に進み、Aさんとの関係がとれていて、その関係をもってすればAさんと母親との間にも入っていくことができるのではないかと考えていたのかもしれない。母親とAさんを含めての話し合いの場をもつことに固執することなく、母親が安心できる環境で本音を聞く必要があると感じた。そこでAさんが授業を受けている間に担任が職員室から電話をかけることとした。また、管理職の許可も得て携帯の番号やアドレスも交換し、いつでも連絡が取れるようにした。以下に母親が電話やメールで語ったことをあげる。

- ・学校には喜んで通っている。問題もなく過ごしていることはとてもうれしい。しかし、家庭での様子は中学部の頃と変わっていない。
- ・連絡帳には家庭での様子を正直に書くことはできない。自分に都合の悪いことを書くと、連絡帳を破ってしまったりホワイトマーカーで消してしまったりする。
- ・母親と言い争いになるとペットの犬を虐待する。犬は病院に通っている。犬は息子がくるとおびえて震えている。
- ・スーパーのチラシを大量に持ってくることもスポーツ新聞を5紙買うことも続けている。
- ・小遣いを渡さないと祖母や祖父に乱暴してお金をもらってしまう。
- ・家庭での様子を「〇〇先生(担任)に知らせるよ」というと「そんなことはするな」とさらに興奮し包丁を持ち出してきたりする。
- ・父親が単身赴任先から一週間に一度帰ってきてくれる。

そのときは比較的穏やかに過ごせるが一度言い争いになると、最近では父親が仲裁しても収まらなくなっている。

・暴れているのが収まらないときは町の駐在さんに来てもらったこともあるが、警察官がくると落ち着いてしまうので問題の解決にならない。警察官に連れて行ってほしいと頼んだこともあるが、目の前で暴れていないと捕まえることはできないと言われた。

担任は言い争いになってもAさんを刺激するような言葉は使わずに、外にでるなどその場を離れて距離をとることをアドバイスしたが、母親もあまりにひどいので「お前など死んでしまえ」「いなくなってしまう」と言ってしまう。外に出ようとすると鍵をかけられたり玄関に立たれたりして出られない。手首などをつかまれてひねられてしまうので痛くて仕方がない、ということであった。母親は今までは学校から家庭での指導をきちんとするように注意されてばかりだったので、家庭内のことを正直に語ったことはなかったという。担任らはまずは母親の支援が必要であることをつよく感じた。あらためていつでもどんなことでも正直な気持ちを話してよいことを伝えた。Aさんが家庭での様子を担任に知られたくないという思いがあることもわかった。家庭での様子を学校でたしなめると、おそらく教員とAさんとの関係が崩れてしまい、本人の学校での頑張りも無駄になってしまうのではないかと考え、本人を問い詰めることはしないようにした。母親のレスパイトケアを考え、社会的資源を活用し、できるだけ家庭から離すことを真剣に考え始めた。

4. 医師との連携

担任は母親とAさんが一緒に通院するのは難しい状況であることを踏まえ、学校や家庭の様子を主治医に知らせることとした。服薬はしているものの母親だけが医師と面談し、薬をもらってくるという状況であった。そこで学校での状態もよく知ってもらい処方参考としてもらうために母親の許可を得て、担任が直接主治医と連絡を取ることにした。これは母親にとっても負担が減り、医師にとっても有益なものであったと後に言われた。受診時間には限りがあり、また母親も伝えたいことをいつも要領よく伝えられるわけでもない。担任と直接主治医が、連絡が取れるようになったことは情報を共有するという意味でも診察の助けにもなり大きなメリットとなった。

5. T学園でのショートステイの成功

母親の心配は長期の休みであった。Aさんが学校に行っている間は気分が休まるものの、夏休みになり毎日家にいるようになるのとどのように過ごしてよいかかわからないということであった。そこで母親の心身の負担軽減と本人の自立の一步として夏休みに福祉法人T学園成人部で実習する計画をたてた。いわゆるショートステイである。家庭から離れて生活することは本人にとっても大きな自信となり貴重な経験になると考えた。Aさんは非常に勘がするどいところがあり自分にとって不利益な場面では絶対に譲らないところがあった。したがっていかにして本人が納得し、自分からショートステイに参加する形にもっていくことが担任らの課題となった。

T学園を選んだのは、歴史も実績もある施設であり、さらに友人が施設長をしていることもあり、施設長を通して綿密な打ち合わせができる可能性があることが大きいということがあった。さらに若い職員も多くAさんとかかわってくれること、作業種が多様でAさんが関心を持ちそうな作業種がみつきりそうなことがあげられた。以下にAさんが自分から一週間のショートステイをするまでの取り組みを示す。およそ2か月前から取り組みをはじめた。

・Aさんに、母親が最近体調が悪くご飯を作ることができない状態にあることを伝える。これは母親に対する暴力で母親が、腕が痛いと言っていることを本人も知っているからである。当然担任らはAさんが原因であることは知らないそぶりで伝えていることである。

・知り合いが働いているT学園という場所があり、優しいお兄さんたちがたくさん働いていて、一緒に遊んでくれる。夏休み家にいると暇になってつまらない。泊まり込みで働くとお兄さんたちと休憩時間にキャッチボールができる。

・一週間働くと給料がもらえる。そうすると好きなものを買うことができる。実際は施設でショートステイをして作業をしたとしても給料はもらえない。しかし、母親とT学園と相談し、あらかじめ2千円を母親から預かり施設に渡して置き、最終日に職員から給料としてわたしてもらおうという計画をたてた。そうすればお金に強い関心をもつAさんは、働いてお金を得るという経験することによって、卒業後就労したいという気持ちにつながるのではないかと考えた。

・担任、副担任、進路主任の3人が1週間のうち3回は誰かが施設を訪問するからさみしくないよと伝えた。

T学園は施設長を含め熱心に取り組んでくれた。事前に作業場所や宿泊する場所の写真、若い職員の笑顔の写真と名前、施設にある野球のグローブなどの写真を送ってくれた。担任はそれを本人に示し事前に説明することができた。押し付けるでもなく教室のカレンダーにしるしをつけて8月のこの日になったら行こうね、と毎日伝えた。予告を大事にし、さらにショートスティをすればいいことがたくさんあるということ焦らずに伝え、本人から行きたいと言いつづけるのを待った。Aさんにとっては大きな決断であるので当然ずっと良い返事はなかった。たった一週間ではあるが母親に執着し、思い通りにできる家庭から離れ、寝泊まりしながら仕事をするという経験は高等部1年生であるAさんにとって非常に大きな出来事であると想像できた。

施設に行く当日、約束の時間にAさんは一人で待ち合わせの駅の改札に現れた。このときの感動は忘れられない。やはり嫌だと言って家からでなかったらどうするのか、家まで迎えに行くのか、それでもだめだったらどうするのか、地域の施設と学校とで取り組んだ計画はまったく成果のないことになってしまうのか、なにしろAさんの成功体験につながらない。いろいろな不安が頭に浮かんでいた。約束の駅に来てくれたことで半分は成功したと思った。T学園では順調に過ごした。もちろん担任らは、3度は訪問し休憩時間に一緒にキャッチボールをしたりAさんが作業で作成した花台を購入したりした。後日、実際に担任宅で花台を使っている写真を見せたりした。このようなわかりやすい視覚的な支援はAさんの自己有用感を高めた。Aさんのように人を信じることに疑いのまなざしを向けることが強い人に対しては、口で「買ったものはきちんと使っているよ」と伝えるよりも実際に使っている写真を示すことで信頼されるということを実感した。Aさんは自分が働いている木工班を自慢げに案内した。一週間の実習は順調に終わった。普段から母親や祖父母から一か月に何万も小遣いをもらって浪費していたAさんであるが、実習の対価として2千円をもらい、一緒に実習を乗り切った経験はお互いに大きな自信となった。この経験はAさんに担任の言うことを聞いていれば間違いない、失敗しないという思いをもたせることになった。そしてこの成功体験は担任にこだわりが向かうきっかけとなった。

6. こだわり行動の変化「〇〇先生になろう」

ショートスティが成功理に終わったことはAさんにとっても家庭にとっても大きな影響を与えた。一番大きな変化はAさんのこだわりが担任に向き始めたことである。この人の言うことを聞いていればよい、この人になればよい、というようにこだわりはじめた。本田(2013)はこだわり行動についてこだわり保存の法則を提唱している。これはASD児者のもつこだわりの総量はきまっているというものである。つまりAさんにたとえて言うならば毎日たくさん新聞を買うというこだわりをはじめいくつかの決まった行動があるが、担任にこだわる部分が増えるとそれらの量が減っていくというものである。問題となるこだわり行動がある場合はプラスとなるこだわり行動を増やせば問題となる行動は減っていくというものである。Aさんの場合もこの法則が当てはまったといえる。担任はこれを好機ととらえ社会的に認められる行動を増やすことでほめられることも増え、不適切な行動は減っていくことをねらって前向きに向き合うこととした。以下にAさんの担任に対するこだわり行動をあげる。

・同じ電車で通学する

生徒は教員よりも遅い時間に登校時間が設定されている。それは生徒が同じ時間帯に電車に乗ることによって、アクシデントがあった場合に助け合えるというねらいもあった。しかしAさんは担任になろうとしているので同じ電車で通学することを希望した。担任としてもスクールバス通学から切り替える良い機会だと捉え認めた。通学途中はルールを守って電車に乗ることを確認した。気が散るときはイヤホンをして音楽を聴いたり、本を読んだりして通学することとした。これも担任が「落ち着かないときは、自分はそうしているよ。そうすると落ち着いて電車に乗っていただけるから」と伝えた。こだわりを利用しルールを守る行動をとらせようと狙ったものである。

・同じパソコン、デジタルカメラ、カバン、メガネ、手帳、ファイル、ジャージなどを買う

担任と同じパソコンを買い、同じデジカメを買ってきた。パソコンもデジタルカメラも担任は仕事で使うものであるが、Aさんもパソコンをもってきて学校で打ち始めた。最初は教えていたが特性を發揮し、文字を書くことは苦手であるがパソコンで打つことは得意になってき

た。母親も学習にも役立つことであるので購入してくれた。デジタルカメラで同じように生徒や教材を撮り始めた。カバンもファイルもファイルの中のプリントの入れ方も同じであるため担任が勘違いすることもあった。



(Aさんと担任のカバンとデジタルカメラ)



(同じファイルを買ひ、同じ順番でプリントを入れる)

メガネも特に目が悪いわけではないがこれも担任になりきろうとしたものである。似たような黒のジャージを着て並んで歩いていると、何人もの生徒や教員から「Aさん、〇〇先生とそっくりだね」と声をかけてきた。それを聞いてAさんはとても満足そうであった。同じメーカーの同じ色の手帳とファイルは、予定を書いたりお小遣いで買ったものを書いたりする学習として活用した。ファイルはプリントの整理の仕方を教えたりするというこ

とで、学習的として成り立った。それらのスキルを本人も意欲的に吸収していった。家で暇な時間は、担任が食べる、であろう食事のメニューや仕事内容などをパソコンで打って印刷してもってくるようになった。母親はパソコンも安くはなく、インク代や紙代などお金はかかるが、何度もテレビや椅子などを窓から投げすてられて、そのたびに買い替えるよりも、毎日の宿題も含めてやるが増え、スーパーのチラシをもってくるなどお店が困るような行動が減少していることを考えれば、許せる範囲だと考えていた。

(月)

- から揚げ
- キョウザ
- おさしみ
- イカえびまぐろ
- ウィスキー
- ホッピー
- ビール
- 日本酒
- いろいろあります

新井様

(月)(火)(水)(木)(金)(土)(日)
お知らせします

(担任名とAさんが考えた食事内容のプリント)

- 夏休み冬休みなど長期の休みも登校する

生徒には当然、長期の休みがあり、その間も教員は出勤し仕事をするわけであるが、Aさんは休みを取らずに登校し、一緒に仕事がしたいと言い出した。担任は管理職と相談し、家庭にいても過ごし方が難しく長い時間を家族で過ごしているとトラブルを起こしやすいことを説明して、担任が出勤している日は登校を認めることとした。Aさんは機嫌よく担任と同じ電車で登校し、教室の掃除をしたりテプラで鉛筆一本一本にクラス名を入れたり、日誌を印刷したり、宿題を行うなどして過ごしていた。担任も職員室ではなくできるだけ教室で仕事をするようにした。見ていると生き生きとしていて暇そうな様子は見られなかった。仕事をしていることを楽しんでいくようであった。熱心に教員の手伝いをするこ

の後の現場実習で大いに役に立つこととなった。

7. 学習場面での連携

2年生になったAさんは引き続きクラスでも穏やかに過ごし、学習場面でも熱心に学習していた。担任が担当する国語・数学グループは重度グループだったので、学習内容はAさんには合っていなかった。そこで個別に課題を用意していたが、2年生になりそろそろ実態に合ったグループに移動してもらってもよいと考えた。しかしAさんは絶対に移りたくないと主張した。少し甘やかすすぎかなと迷ったが、引き続き個別の課題を用意することで対応し3年生になったときにグループを変えることとした。3年次ではAさんもあきらめたようでグループを移動することに同意した。ただ学習がわからないとそれをもって担任のグループに勉強しにきた。該当グループでは人数も多く一人一人に割く時間に限りがあり、個別にかかわる時間を完全には保証できなかった。そこで一斉指導についていくことができる場合はその場で学習し、落ち着かなくなったり、勉強につまずいたりしたときは担任のグループで学ぶことをグループ担当教員とも話し合い、連携をとって進めることとした。少しずつ学習場面では担任から離れることができるようになっていた。

8. 地域のケアホームでの生活

3年生になり家庭では暴れるなどの行動は減ったとはいえ、無くなったわけではなかった。電車で帰宅途中の担任に「いま暴れています。どうしたらよいでしょうか？」という電話がかかってくることもあった。長年にわたって築かれた母親との悪循環の関係は簡単には解決されるものではなかった。現場実習がはじまり、卒業が現実的なものになっていくにしたがって、母親からは「卒業後は一緒に暮らすことは難しい」「簡単には戻ってこれない遠いところで就職させたい」という内容の連絡が目立つようになった。Aさんの成長は目覚ましいものがあるが、小学校時代からの母親の心労の積み重なりは限界にきており、担任は進路主任とともにAさんが在学中から家庭を出て、地域の施設から学校に通うことはできないのかを本格的に模索し始めていた。これは短期入所とは違い、かなり困難を極めた。Aさんへの取り組みとしては担任になろうとしているこだわりを活用した。「Aさん、先生はね、高校時代には一人暮らしをしたんだよ。料理も覚えたし、掃除もできるようになった。それは就職するときにとっても役に立った。そして楽

しいこともたくさんあった。テレビとか一人で見るのができたし、一人の時間を楽しんだよ。」「Aさんの場合は、自分一人でなんでもするわけではなくって。優しいお兄さんが一緒に暮らしてくれて、お金とか薬の管理はしてくれるし、ご飯も作ってくれる。仲のいい友達もできるかもしれないよ。やってみようか？」と伝えた。それでもさすがにAさんは家をでることは嫌がった。これもまた納得したうえでなければ意味のないことであった。いくつかの福祉法人が運営するグループホームや会社が経営するケアホームを一緒に見学した。どこにいてもAさんは、自分を家から引き離されるという意識が働き、しり込みしているように思えた。担任らの焦りが本人に伝わるといけないと思い、日にちをあげながら一緒に遊びに行くように訪問を繰り返した。ある会社がケアホームを立ち上げるという話を聞いた。職員も若くホームページによると男性スタッフ2名は二人とも甲子園球児であったそうだ。野球好きなAさんにとってとても良い環境だと思われた。面談のうえ、高等部在学中からケアホームに入所し、そこから学校に通うことになった。Aさんが入所を決心した理由は以下のことが考えられた。

- ・担任も高校時代に一人暮らしをし、そこで培った力が就職にとっても役に立った。Aさんもそのようになるよと伝えたこと。

- ・家庭ではキャッチボールなどできないがケアホームでは野球の好きなお兄さんたちがいて一緒に遊んでくれたり、休日には一緒にプロ野球を見に行ってくれたりすること。

- ・仲良しの友達ができるかもしれないこと。(ケアホームは利用者5名に対して職員2名の体制である)

- ・一週間に一度は実家にかえることができること。

そして何よりも重大なポイントはショートスティの成功以来、担任の言うことを聞いておけば間違いはないと信じていたことである。もちろん順風満帆にいったわけではなくケアホームでも夜まで遊んでいて帰らなかったり、実家に帰りたいたと駄々をこねたり、小遣いは全部自分にわたせと訴えたりすることもあった。その都度、ケアホームの職員と担任、進路主任が話し合い、本人と話し合い対策をたてた。Aさんはケアホームから担任が乗っている電車に乗って合流し、学校生活を送っていた。担任やクラスメイトは心からAさんの頑張りをほめた。

母親も一週間に一度だけAさんが帰ってくることによって心にゆとりが生まれ、言い争いをせずに接することができるようになっていた。仕事とはいえ、ケアホームの若いスタッフは本当に頻繁に連絡をくれ、困難な場面でも粘り強く対応してくれた。担任はいつケアホームを追い出されるのかひやひやしていたが卒業後もそこでの生活は続いている。

4. 対人関係の深まり

高等部1年のころのAさんの対人関係の取り方は、物を介してのやりとりが中心であった。小遣いをたくさんもらうAさんはお菓子などを学校に持ってきてはクラスメイトに配って、友人関係を築いていた。財布の中身を見せてはお札が入っていることを自慢していた。時には友人から「お金持ちすぎる」「むだ使いしすぎ」と非難されることもあった。しかし、2年、3年と過ぎるうちにショートスティを頑張り、現場実習を乗り越え、在学中からケアホームに入所し、そこから学校へ通うAさんを見て「とてもがんばっている」という評価をうけることになりクラスメイトからも一目置かれるようになった。また、Aさんから担任へのメールや電話は毎日10件から20件くらいあった。多くはケアホームでの生活の不満や現場実習先での困難さであった。電話を受け取るときに担任は友人と一緒にいることもあるし、生徒と一緒にいることもあった。そのときは担任だけではなく担任の友人やクラスメイトにも電話にでもらうことにした。Aさんは担任の友人はみな良い人と信じていた。担任の友人も意図をくみ取って「Aさん、〇〇先生から聞いているよ。すごく仕事頑張っているんだって?」「家をでて暮らしているんだね。えらいね」とほめてくれた。そのたびに電話の向こうからはAさんのうれしそうなお声が聞こえた。このようにしてAさんは大人の知り合いも増えていくことになった。

<エピソード5 みんなの声が聞きたい>

「Aさんが就職を決める最後の現場実習に出かけているある日に、Aさんから担任の携帯に電話がかかってきた。ちょうど学校では給食の時間であった。電話にですると実習が辛いという。そしてみんなからがんばってと言ってもらいたいと言った。担任は携帯をクラスメイトにわたした。みんなは順番に携帯に向かって『Aさん、がんばれ』『応援している』と励ました。」

Aさんからこのような要望がでたのは初めて出会っ

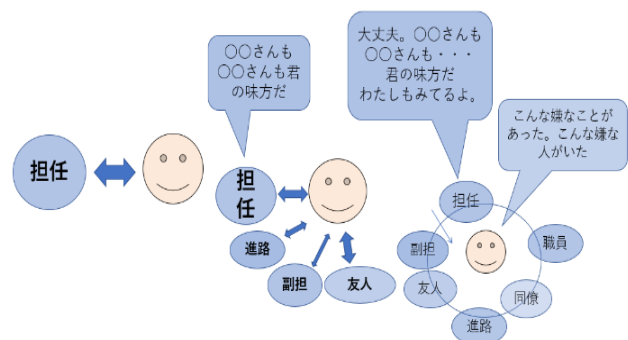
た。みんなに応援してほしい、そうしたら頑張れるという気持ちが芽生えた瞬間であった。

IV. 結果

1. 人への信頼の回復

Aさんは小学校から中学部まで叱られ続ける毎日を送ってきた。特に中学部に入ってから体も大きく力も強くなり、家庭では抑えが効かなくなっていて、自分の思いが通らない場合は暴力で思いを通していった。それを母親から聞いた担任が強く叱るという繰り返しであった。分岐点となったのは、高等部進学をきっかけに環境を変えたことにある。学校ではクラスメイトと楽しく生活し、認められる存在となり、学校生活を、自信をもって送ることができるようになった。それは人へのこだわり行動を利用し、こだわる人を増やしていくことによって、一人の人間(担任)へのこだわりの量が減り、そのエネルギーが他の人たちへ分配されたことによる。つまり重要な他者から複数の支援者への移行といえる。最初は担任とAさんとだけが深いつながりを持ち、その後副担任、進路主任とショートスティという課題を乗り越えてつながりが増え、その後クラスメイトにも頑張りや認められていった。当初は一日に何十本も電話やメールがあったが、年が過ぎるにしたがって頼る人が増え、友人関係も広がり、担任に対する連絡は2か月に一度くらいとなった。大勢の人は自分を応援している、困ったときには多くの人が話を聞いてくれるということを実感しているようであった。

重要な他者から複数の支援者へ



2. 支援付き自立の成立

Aさんは成人後も同じ職場で働き、同じケアホームで暮らしている。食事の用意、給料の管理、服薬の管理はケアホームの職員が行っている。Aさんに任せればもらった給料はすぐに使ってしまうだろう。Aさんもそのこ

とは自覚している。人にはそれぞれの能力にあった自立がある。ケアホームでもトラブルがないわけではない。わたしたちがそうであるように生活していればさまざまなトラブルに見舞われるし、スランプもあるしやけになることもある。家族ではなく専門家であるケアホームのスタッフが根気よく日常を共にしながら支援してくれている。

3. 係活動やお手伝いから現場実習、そして就労へ

Aさんは運輸会社で実習を行った。仕事内容は物品の仕分けである。力仕事でもあるが体格の良いAさんはよく働いた。それでも他校の実習生と比較すると知的な面では劣っているようであった。指示も他校の生徒のほうがスムーズに理解できているように思えた。しかし、Aさんは実習で高い評価を得て、2度目の実習に臨むことができた。これは実質的に就労を決める実習であった。担当者は担任にAさんについて次のように語った。「流れ作業をしているときにAさんは自分の仕事だけではなく他の人が仕事しやすいように気を配っている。その点をとても高く評価している。そのような実習生は彼だけだった」これはまさしく学校においてほぼ3年間「先生、次は何をしようか?」「〇〇しておこうか?」「〇〇が足りなくなっているよ」など自分から仕事をさがして長期休業日も働いていた成果がでたと考えられた。自分の仕事だけではなく自分から仕事を探すという姿勢も身に付き、それで褒められる経験を積んでいったというAさんが評価されたのだと思った。就労してからは指導係である上司を信頼し上司に毎日電話するようになっていた。しかし上司も丁寧に対応してくれていて休日は一緒にボウリングに行くなど余暇を広げてくれた。お金を同僚に貸してしまう、返してもらっていない、などのトラブルもあるがその都度、元担任や上司と相談し解決できている。上司もまた複数の支援者の一人となったわけである。

4. 友達関係の構築

在学中の2年間はほとんど教員を通しての友人関係であった。Aさんもクラスメイトとかかわるよりも大人と一緒に過ごすことを好んだ。しかし、3年生になりAさんの頑張りがクラスメイトに認められるようになると友達同士でのかかわりが増えるようになった。卒業後もAさんから「〇〇さんのライン知っている?消えてしまった」「〇〇さんと電車で会った」という連絡をもらうことがたびたびあった。元担任が友達に「Aさんから君の

ラインを教えてほしいと言ってきたから教えてもいい?」と聞くとみんなが快く承諾してくれていて、卒業後も支援者抜きで友達同士良好な関係が続いていることがうかがえた

V. 考察

1. たくさんの人から認められる大切さ

Aさんは人とかかわることが苦手であった。しかし、どちらかというと人が好きであり、むしろ付き合い方がわからないという感じであった。当初は自分のお金を見せたり、家から持ってきたお菓子を渡したりして関係を取ろうしていた。3年間学習や係活動場面で褒められ、さまざまな課題を乗り越えることでクラスメイトからも、Aさん自身が認められるようになり、Aさんも友人を頼るようになり、信頼されることの心地よさを感じるようになった。学習面でも成長したが、人を信用できるようになったことが就労にも結び付いた要因であると思う。またAさんは注意され続ける学校生活であったため、否定的な言葉に非常に敏感に反応し、攻撃的になっていた。たくさん褒められる経験の中で気持ちの安定が図られ、だからこそ注意が有効に機能するということがわかった。

2. 構造化の大切さ

構造化とは、その人にとって理解しやすい心地よい環境を意味する。いつも緊張する環境のなかで生活していたAさんは生きづらかったろう。高等部に進学することをきっかけに環境を変えたことは、Aさんにとって自分を立て直す大きなきっかけになった。逆言えば、同じ環境の中で行動や考えを変えていくことはかなり難しいことであるといえる。例えばAさんは高等部3年間の中で家庭での生活態度を変えることはできなかった。Aさんにとって今までは何でも受け入れてくれた母親が受け入れなくなるのは許せないことであり、母親にとっても貫き通すのは困難なことであった。結果的にはケアホームに入所し、そこから学校に通うという物理的構造化を図り、親子では暮らさないという方法をとった。その結果、どちらにも気持ちにゆとりが生まれ、実家に帰宅したときには比較的穏やかに過ごせるようになった。地域の社会的資源を有効に使うということは非常に大切なことである。医療や福祉施設などは、家庭で受けきれなくなった時に利用するものという考えが浸透しているよう

に思う。どうしてもなくなった時に利用するという考えではなく有効な時期に有効な活用の仕方をする、それは責められるものではないという思いがある。

3. 母親支援の大切さ

卒業後母親とゆっくりと語り合う機会があった。母親は学校時代を振り返り次のように語った。

- ・小学校の時から祖父母には「お前の育て方が悪い」と責められてつらかった。
- ・親友に子育てのことを相談したときに「もっと子どもにやさしくしてあげて」と言われてショックを受けてしまい、もう相談することができなくなった。自分としては精いっぱいだったのに。
- ・父親は単身赴任で相談する相手もいなかった。
- ・学校では2名の男性教員が担任であり「学校ではいい子で過ごしています」「家庭でもきちんと指導してください」と、学校から連絡があるときは注意されることばかりでつらかった。
- ・話を聞いてくれるのはペットの犬だけであったが、その犬を息子がいじめるのでつらかった。それで自分もカッとなって辛辣な言葉を息子に投げかけてしまった。
- ・新任から「大丈夫です。まかせてください」と言われてほっとした。

母親の話聞きながらいままで母親は誰からも支援されてこなかったのだと思った。そのようなつらい状態で子育てをしているなかでAさんと暮らすことは相当な負担となっていたと思う。せめて学校が理解者となつてあげられなかったものか。担任は「大丈夫です。まかせてください」と言ったことは覚えていない。しかし、思わず出た言葉が母親を安心させたことは確かである。どのような場合でも担任は前向きに保護者に接し、育て方を責めるべきではないと感じた。なぜならば教員は学校という空間で半構造化された空間、つまり生徒とは関わりやすい環境で接している。保護者は夕方から朝にかけて一番大変な時間を一緒に暮らしていると言える。そのことを教員は忘れてはいけないと再確認した。ケアホーム入所後も就労後も母親がゆとりをもって接することができるようになったことはAさんの精神状態の安定に影響を与えていないはずはないと考える。

4. 個を尊重してこそ集団がある

学校の役割にはさまざまものがあるが、集団を学ぶ、仲間関係づくりが大きな役割であろう。しかし、個に応じた支援がなされていなければ集団に適応させるだけの指導になってしまう。Aさんの場合、徹底して反社会的なことだけでなく、実現可能なことであるならばできる限りAさんの希望を取り入れることにした。こちらが歩み寄ることによって、Aさんも歩み寄ってきてくれた。そこには「合意」が成立し、一方的にやらされるという関係にはならなかったのだと思う。結果的に個に応じた支援を行ったことにより、さらに集団に参加できるようになった。「そんなことをして他の生徒がまねしたらどうする」「甘やかしているのではないか」「学校には学校のルールがある」などの言葉はよく聞かれるし、実際Aさんの担任もAさんを支援する学年集団も他学年からそのように言われた。しかし結果的にAさんの行動は変容し、無理だと言われていた企業就労を可能とした。それは個に応じた支援を行い、その力が集団の中で発揮され、自分の力を最大限に発揮した結果だと考える。学校という場の中で個に応じた支援をいかに行うことができるのかそれが発達障害をもつ児童・生徒への支援を考える上でのポイントではないかと考えられる。

[参考文献]

- 新井豊吉 (2014). 『知的障害特別支援学校の現状と課題』.
発達障害ベストプラクティス 星和書店
- 本田秀夫 (2013). 『自閉症スペクトラム』, ソフトバンク新書